

81

解剖学の脱動物化

——ガレノス解剖学の伝承と解剖学の変化——

澤井 直

順天堂大学 解剖学・生体構造科学講座

1525年に出版されたガレノスのギリシア語版全集（Aldine版）は、西欧の医学全体を揺り動かす大きな出来事であった。アラビアの医学書に書かれた情報から、あるいは一部の著作のみを通してしか知られていなかった古代医学の権威ガレノスの全貌が明らかになることで、その理解・吸収が医学にとって急務となり、1530年代にガレノスの翻訳の出版が急速に増加する。

この変化は解剖学にも波及する。15世紀までは14世紀に成立した『モンディーノ解剖学』やモンディーノが参照したとされるアヴィセンナなどがよく用いられていたが、16世紀になるとガレノスのラテン語訳やガレノスに大きく影響を受けた解剖学書が増加する。

現在ではガレノスはヒトではなく主にサルを解剖していたことが知られている。実際、ガレノスの解剖学関連の著作にはサルを解剖したという記述がよく見られる。ガレノスはサルの内部構造がヒトのものと似ていることを明言しており、サルの解剖から人体構造の理解が可能であると考えていた。

ガレノスによる身体の構造に関する記述を現代の解剖学の知見と比較すると、ガレノスがサルの構造として記述する内容の多くはヒトのものとして捉えることが可能である。この理由の一つとして、ガレノスが構造の長さや大きさについて具体的な数値を挙げておらず、諸構造は他の構造との相対的な位置関係、形態や他の構造との連絡などから記述されていることが挙げられる。

16世紀においてガレノスの解剖学関連の著作をヒトについての記述として解釈する医学者は多かった。ガレノスのラテン語版の編集・解説書の出版に関与したパリ大学のシルヴィウス（Jacobus Sylvius, 1478–1555）は、実際に人体の観察を行いながらもガレノスによる記述を人体についてのものと考えた。

一方で、サルとヒトの間には長さや大きさだけではなく、位置関係・形態・連絡において異なっている構造も存在する。ガレノスの記述は詳細であり、またそうだからこそ細部の記述においてサルとヒトとの差異が浮かび上がってくる。ベレンガリオ（Jacopo Berengario da Carpi, 1460–1530）やマッサ（Niccolo Massa, 1485–1569）のように、自らの観察を通じて古代の権威のとは異なる見解を表明することもあった。上述のシルヴィウスも実際の人体観察ではガレノスの記述とは異なっている構造があることを認めている。

ヒトに関する記述として捉えることができるが実際は動物の観察に基づいて書かれているガレノス解剖学書を、ヴェサリウス（Andreas Vesalius, 1514–1564）は新たな手法で扱った。『人体構造論』（1543）はガレノスの記述を受け入れている部分も多く、決して一から人体解剖を行ってその結果を記しているのではない。ただし、ヴェサリウスは動物観察と人体観察を用いて、ガレノスの解剖学書に含まれる記述を動物についてのものとヒトについてのものとに区別して、動物によるものを斥けている。

つまり、ヴェサリウスはガレノスに含まれていた動物についての記述をヒトのものに置き換える「脱動物化」を図ったと捉えることができるのである。この「脱動物化」はヴェサリウス以外にも見られる。コロombo（Renaldo Columbo, 1516–1519）はヴェサリウスによる多くの記述を動物に基づくものだとし、自らの人体解剖から得られた知見を述べるが、ここではヴェサリウスの脱動物化が図られ、より正確な人体構造の理解へと進んでいる。

16世紀の解剖学の展開を語る際に人体観察の徹底はよく指摘されているが、実際には、動物の観察も援用し、人体解剖で観察した内容を既に存在している見解と照合することで人体についてのより詳細な知見を得ていたのである。人体解剖を行ったことの意義の一つとして「脱動物化」は無視できない要素だと考えられる。